

を構成するものである。物語の世界への明石姫君・明石上の新しい導入は、「若菜」冒頭以来の矛盾葛藤の世界の論理が、年代記的な時間の帯に解消されるか見えながら、そうではない。そこではより内面的な葛藤のすがたが、分厚い立体的な場に組成しなおされた一世界を、前進的に附加したことになるというしだいである。さて右の考察から、私どもはさらに転じて70以後の問題に入らねばならぬが、ちょうど与えられた紙面もついでやされてしまったので、この辺でいちおううちきりとすべきである。(冊35・7・23)

密な関連にとどまらぬ。その62からここまでには光源氏の、拾収緩和をこれつとめ、しかも事態の中心問題から疎外されている姿、そしてやがてそこから朧月夜のもとへ耽溺して行くような、それはそれで真実性をはらんだ分裂的行爲が介在してはいたではないか。あるいは紫上の、そのいのちそのものが不幸であるような人間像があさやかに彫り出されてはいたではないか。なるほど67の記事になると紫上は明石女御から生母明石上以上にしたわれているとかかれ、また紫上の深い情愛が指摘されてもいる。だが、そのような記述に關しても、さきに見た「宮よりも、明石の君のはづかしげにて交はむを思せば……」(2)という紫上の緊張的態度を私どもは忘れることができない。明石女御との対面は、その人の生母、つねにその身に添う後見明石上を無視して行われるものではないのである。関連して「明石女御が」とうつくしげにおとまびきり給へるを、思ひ隔てず、かなしと見奉り給ふ」という叙述は不注意にのみみすげないだろう。女御と血につながるものでない紫上であるがゆえに、「思ひ隔てず」と、その心について微妙なふれかたがなされている。けれど紫上の明石女御に対する情愛やまた女御にしたわれること以外に、いまは何が紫上のいのちのよりどころとなるであろうか。67にかかっている、それだけでは一見何ということない両者の交渉は、さきに紫上頰が最大限につづられているのと同じ意味あいにおいて、紫上の複雑な内面性をはらんでいると解せられよう。この67から68・69がみちびかれてくること前述のとおりである。

このように考えずみとみると、小稿がさしあたりとりあげた「若菜」61-69の叙述は、その各段ないし各場面が緊密に内面的に交渉しあっている、はつきりと統一されたひとつの全体的な局面

隆能源氏絵詞「蓬生」鑑賞

玉 上 琢 弥

などしているのであるが、本稿もその仕事の一部である。

二、詞書と源氏物語の諸伝本

先ず詞書を、校異源氏物語や日本古典文学大系本に挙げられた校異を基に、調査しながら、気づいたところを述べる。

詞書をあげるに際し、判読した字は右傍に「―」をつける。判読も不可能なものを、前後の文や物語本文を案じて、一往補った字には右傍に「―」をつける。

詞書の文字づかいはもとのままだが、濁点と句読点をつける。源氏物語の諸本にありながら、詞書にない文は「」をつけて示す。

蓬生の巻の伝本で校異源氏物語に採られたのは、青表紙本では御物本・大島本(飛鳥井雅康筆)・横山本(為家本(佐藤原為家筆)・榊原本(伝三条為氏筆)・池田本(伝三条為明筆)・肖柏本(牡丹花肖柏筆)・三条西家本であり、河内本では七毫源氏(伝學筆)・高松宮家本(邦高親王筆)・尾州家本(伝清水谷実秋文九条道家筆)・大島本・鳳来寺本・曼珠院本(辨雲筆)であり、別本は陽明家本のみである。

藤原時代の代表的絵巻物の一つ、源氏物語絵は、藤原隆能が描いたとされた(『絵巻』牛鹿巻)ところから、隆能源氏絵と呼ばれる。はやくから鑑賞者および美術史家には重んぜられていたが、近頃は特にその研究が進んだ。この詞書は、平安時代に書かれた唯一の源氏物語の本文であるから、国文学者も大いに注目するのだけれども、他の伝本とあまりに違いすぎ、省略や改変が大きくて、校合もできないほどであるため、敬遠されていた傾きがある。それでも、近くは、武田宗俊・池田亀鑑・山岸徳平・岩下光雄諸氏の研究がある。ここには、この詞書を、その絵と合わせ見ながら読む試みをしてみようと思う。

詞書の翻刻も種々あるが、なお決定しかねる点も少なくない。よつて、諸説を勘案して、わたくしなりに一往の決定を下し、青表紙本との異同を中心に、諸本の異同を若干、対校の形で見やすいように翻刻した(『女子大文学』第十一号、本年二月刊)。これを基に種々操作を行ういつ、あり、源氏物語諸伝本の関係部分も新たに写真撮影して校合

日本古典文学大系本は三条西本を底本とし、吉田幸一氏蔵本(文
本)を写本・本種久邇文庫本(定家本転写の嘉元本)・東山文庫本(後醍醐
帝宸翰等の本)・蓬左文庫本(天文二年写三条西公家本)・書院部本(後陽成帝
宸翰等の本)・山岸本(寛政説書入公家本)である。

女子大文学に「校勘能源氏繪詞」として翻刻するに際し参照した
のは、久野健・白畑よし(益田家本源氏物語繪卷二)昭和二十四年三月・源
豊宗(国語国文)昭和二十八年八月・中村義雄(美術研究)昭和二十九年三月
・日本絵巻物全集、源氏物語繪卷(昭和三十三年六月)・小松茂美(墨美)昭和
三十年二月・池田龜鑑(源氏物語大成、研究資料篇)昭和三十年十二月、諸氏
の翻刻である。

以下に引用する源氏物語の本文には、校異源氏物語の頁数と行數
を、漢数字と算用数字で示しておく。

○うづきばかりに、はなちるさとおぼしうてたまひ——「おぼ
す」は敬語動詞であって、敬語助動詞「たまふ」は附かないはずで
ある。しかし、鎌倉時代になると、「おぼし敷きたまふ」というふ
うな例も見える(根来司氏「中古敬語の崩壊過程」河内本源氏物語にみえる「昭
和三十四年十月十七日国語学会研究発表会」・国語学)第三十九号所載要旨による。

青表紙本は「おもひいできこえたまひて」と、正しい用法になっ
ているが、花散里に敬語「きこえ」が付いている。河内本は「おぼ
しいできこえたまひ」とあって、詞書と同じ誤をしているが、花散
里に対する敬語「きこえ」が青表紙本と同じく付いている。

花散里についての敬語を調査すると、初出の花散里の巻ですでに
地の文にも敬語は付くけれども(二八七)一人の御心をみつくはて給ふべ
かめるをも)、光源氏とともに叙するところでは敬語なしである(三
八七)「御おとうとの三の君、うちわたりにはかなうほめきたまひしなり」とあ

○ひこみふりつるなごりのあめすこしそぎて——このあと諸本
「をかしき程に月さし出でたり。昔の御ありき思し出でられて」と
ある。「月」(省略2)、「昔の御ありき」(省略3)。

○えむあるほどのゆふづくよに——諸本に「えむあるほどの」と
するに従うべきである。青表紙本のうち横山本は、詞書と同じく
「えむある」とするが、誤りであろう。

○みちのほどよろづのことおぼしいで、おぼするに——この句は
「昔の御ありき思し出でられて」を受けて出ているのだから、詞書
のようにそれが省略してあっては、感心しない。

○かひもなくあれたるいゑの、こたらしげきを、すぎたまふ——
物語の諸本「こたらしげく「森のやうなる」を」とする(省略4)。
青表紙東山御文庫本が「家をすぎたまふ」とするのは、誤脱であ
らう。

○おほきなるまつに、ふちのさきかゝりて、つきかげになよびた
るに——諸本「月かけになよびたる」。「風につきてさきにほふがなつ
かしく、そこはかとなきかをりなり、橋にはかはりてをかしければ、
さし出でたまへる」に」とする。「風」(省略5)、「かをり」(省略
6)、「橋」(省略7)、「車から」(省略8)、「さし出で給」(省略9)。

○やなきもいたくしだりて、ついでひちもさきはれねば、みだれふ
したり——「れ」は衍字、諸本にあるように「さきはれねば」と改む
べきである。「ついでひち」は、青表紙本の大島本と河内本が「ついで
ひち」とするが、他はすべて「ついで」である。須磨の巻四二〇5
では大島本も「ついで」とし、河内本のうち高松宮家本・尾州家本
・平瀬本・大島本と青表紙本のうち飯島本は「ついでひち」、同じく
横山本は「ひ」を見せ消しにし、その他は「ついで」である。総索

つて「たてまつりたまひし」でない。三九〇「西面には、わざとなくしのびやかたう
ちふるまひたまひて、のぞきたまへるも、めづらしきに添へて、よにめなれぬ御さまな
れば、つらさも忘れぬべし」光源氏に敬語があり、花散里にない。

しかるに須磨の巻では昇格して、源氏とともに敬語があり(三九六
3「かの花散里にも、おほし通ふことこそまれなれ、心細くあはれる御有様。この
御かげに隠れてもしたまへば、思しなげきたるさまも、いとことわりなり」)、「き
こえたまふ」の例もある(四一五8「いみじとおぼしたるが苦しければ、か
はなくさまきこえたまふ」)。だから、蓬生の巻に「おもひいできこえたま
ひ」とあっても、よいのである。

念のため、言えは須磨の巻四二〇4「おぼすらむと思し、やりて」
と光源氏の心中でさえ敬語つきであり、漂標の巻四八七4「花散里
などの心ぐるしき人へすませむ」は同じ光源氏心中で敬語がな
い。心中に思う時に敬語が付くのは大変尊敬している人なので、花
散里は光源氏心中では敬語が付いたり付かなかったり程度の扱いで
あると見てよからう。そのあと蓬生の巻のこの文である。

さて、詞書のように「おぼしいでたまひ」とあっては、やゝ花散
里が軽くなりすぎそうである。不注意の誤脱であろうか。たすけて
考えれば、詞書は登場人物を光源氏と惟光と老女の三人にしほり、
末摘花の姫君も紫の上も省略している。花散里はやむなく出しはし
たけれども、なるべく軽くしようとしたのかも知れない。源氏物語
の本文を読む時と、このように一場面を断ち切った詞書とは、ず
いぶん違うことになることは、三で論ずる。

○しのびいでたまふ——諸本「しのびて」(対の上)に御いとま聞
えて」出でたまふ。詞書は、対の上(紫の上)に光源氏が外出の挨拶
をするのを省略している。注意すべき省略である。(省略1)。

引によれば源氏物語中の用例はこの二箇所のみであって、いずれと
も決しかねる。

○みしこちするかな、と、おぼすは——諸本「みしこちする
「本立」かな」(省略9)。

○はやこのみやなりけり——青表紙本と別本とは「はやう」・河
内本は詞書と同じく「はや」である。宣長の玉のをぐし七に「此は
やうは、俗言に、もとよりそのはずちやといふ意也」と注する。源
氏物語では珍しい用法である。

このあとに諸本は「いとあはれにておしとめさせたまふ」とあ
る。車をである(省略10)。

○れいのこれみつは、かゝる御しのびありきにおくれねば、さぶ
らひけり——このあとに表し省略がある。「召し寄せて、ここは常
陸の宮ぞかしな、しか待ると聞ゆ。ここにありし人はまだやながむ
らむ、とぶらふべきを、わざとものせむも所せし、かかるついでに
入りて消息せよ、よくたづねよりてを、うち出でよ、人がかへして
はをこならむ、と宣たまふ。ここには、いとどながめまざることに
て、つくづくとおぼしけるに、屋敷の夢に故宮の見えたまひけれ
ば、さめていと名残かなしく思して、もりぬれたる箱の端つ方おし
のごはせて、ここかしこのおまじ引きつくるはせなどしつ、軒な
らず世つきたまひて、なき人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒の
しづくさへ添ふも心苦しき程になむありける」。光源氏と惟光との
問答(省略11)、末摘花の姫君(省略12)。

○いれてたづねさせたまへば、めぐるくいでりて、人のおとする
かたやある、と、みるに——諸本「惟光いりて、めぐるくいでりて、人のおとする
するかたやと見るに」。詞書は、すでに、光源氏が惟光に命じた詞を

省略したから、「いれて、たづねさせたまへば」としたのである。省略に伴う改訂である。しかし、「めぐる〜いりて」とするのは、重複の感がある。

「人のおとするかたやある」は、青表紙の横山本「かたやある」ある「補入」。同じく三条西本「人おとするかたやある」河内本は「人のこゑするかたやある」と、詞書に同じく「ある」がある。あつてもなくても意味は変らぬが、ある方が意味が重くなつてよきそう

だ。
このあと諸本「いささか人氣もせず。まればこそ、ゆききの道に見入るれど、人住みげもなきものを、と思ひて、帰り参る程に」とある〔省略13〕。

○月あかくさしりたるに、みれば——河内本は詞書と同じだが、他は「さし出でたるに」とする。「さし出でたるに」だと、しばらくは雲間に隠れていたことになる。前に「をかしき程に月さし出でたり」と言い（たゞし詞書は省略、「艶なる程の夕月夜に」と言い、「大きな松に藤の咲きかかりて月かげになよびたる」と言うが、その月が雲間に隠れた記述はない。記述はなくとも、一時雲隠れしていたと見ても差支えない。源氏物語はそういう書きぶりである。けれども、「さしりたる」月光が屋内にさし入っている」と見る方がよきそうではある。

○かうしふたまばかりあげて、すだれおごくけしきなり——諸本「うごく」。「おごく」の例は源氏物語にはない。たゞし帯木の巻六〇三「鼻のわたりおごつきて」を、河内本および別本（陽明家本・風冬本）と青表紙のうち三条西家本とは「おごめて」とするが、このおごめては「おごく」と関係があるかも知れない。辞書には重

過ぎがてにとまらせ給へるを、いかが聞えさせむ、後やすくを、といへば、女どもうち笑ひて、かはらせ給ふ御有様ならば、かかる浅茅が原をうつろひ給はでは侍りなむや、ただおしはかりて聞えさせたまへかし、年へたる人の心にも、たぐひあらじとのみ、めづらかなる世をこそは見たてまへり過ぐし侍れ、と、やや」惟光と老女との問答〔省略15〕。

○くついで、とはすがたりもしつべければ——諸本「しつべきが〔河内本「しつべきを」むつかしければ〕〔省略16〕。

○よし〜とて——諸本「とて」なし。
○まづかうなむときこゑむ、とて、まいるぬ——「まづかうなむ」と「のかう」を諸本「かく」とする。なお「と」が青表紙の大島本・榊原本・池田本・肖柏本にないのは意味が通じるけれども、別本の「かくなど」と「む」がないのは面白くない、誤脱であろう。詞書だと、「よし〜とて」と、「まづかうなむときこゑむ」との間が並列する。「よし〜」の語と「まづかうなむときこゑむ」との間は、相当大きなポーズ（ま）があったことになる。

諸本のように、上の「とて」のない方がよきそうだが、
なお、諸本はすべて「きこえさせむ」と「させ」がある、ある方が惟光の詞らしい。
○などかひさしかりつる——諸本「などか（いと）久しかりつる。」「いかにぞ（青表紙の御物本のみ「いかに」）

○むかしのあともみえぬよもぎのしげさかな、と、たまへば——
「と、のたまへば」の誤脱である。
○しかん、なむ——このあとに、諸本「たどり寄りて侍りつる、侍従が叔母の少将といひ侍りし老い人なむ、かはらぬ声にて侍りつる、

之集「又この君（みちの國の権守の母君）足高蜘蛛の、手ひとつ落ちたるが、二三日ありて、なほおごくを、ささかたのくものはたてのおごくかな風を命に思ふなるべし」（後醍醐天皇一九九一年）を引く。

○わづかにみつけたるこゝち、おそろしくさへおぼゆれと、よりにたて、かれはなに人ぞ、といふこゑ、いたうねびすぎにたれど——諸本「かれは（たれぞ）何人ぞと問ふ」。「たれぞ」を、青表紙の御物本・横山本・為家本・榊原本・池田本は「たそ」、別本は「たれ」とする程度の異同にすぎぬ。詞書は、誤脱か、省略か。「なに人ぞ」を河内本は「なに人」とする。

このあと、諸本「〔名のりして（別本「なりのりて」）侍従の君と聞えし人に対面たまはらむ、といふ。それははかになむものしたまふされど思しわくまじき女なむ侍る、といふ（別本「女なむ侍るといふ」）なし）こゑいたうねびすぎたれど（河内本「女なむ侍るとねびすぎたれど、あてはかな）けはひしていらふ」とある。侍従〔省略14〕。

詞書の「ねびすぎにたれど」より、諸本の「ねびすぎたれど」の方がよきそうである。
○さしおひとさしりりけり——「おひと」は「おひびと」の誤脱。「さしりりけり」は「青表紙本「さしりりたり」」。河内本は「たいふはさしりりおひ人のこゑとさしりりけり」。

このあと、長い省略がある。「内には、思ひも寄らず、狩衣姿なる男の、しのびやかにもてなして、なごやかなれば、見ならはずなりにける目にて、もし狐などの変化にやとおぼゆれど、近う寄りてたしかになむ承らまはしき、かはらぬ御有様ならば、たづねきこえさせたまふべき御志も絶えずなむおはしますめるかし、今宵も行き

る」とある〔省略17〕。「侍従が叔母の少将」と名をあげ、また説明するのは、ここが初めの終りである。
○と、ありさまきこゆ。いみじくあはれにて——諸本「いみじう（河内本「いみじう）あはれに」。

○かゝるしげきのなかに——青表紙本「かゝるしげきなかに」（榊原本・池田本は「しげき中に」、河内本「かゝるしげりのなかに」、別本「かゝるの中に」。

詞書は「かかる繁木の中に」の意であろうか。そういう言い方があるであろうか。青表紙本は、直前の源氏の詞のひびきで「かかる（さの）繁木の中に」の意と解しうる。河内本は「繁木の中に」で、意は青表紙本と同じであろう。別本は「かかる野中に」か、あるいは河内本のように「かかる繁木の中に」などあったのが誤脱したのか、あるいは又、「の」が衍字で「かかる中に」（もつとも、これは舌たらずの感がある）とでもいうのか、あるいは詞書のように「かかる繁木の中に」とあったのか。

○なにごちして、すぐしたまふらん——河内本「たまひつらん」と。
○いま〜ととほざけるよ、と、わが御心のなげなきもおぼし〜らる——青表紙本の御物本のみ「わが心の」と「御」がないが、誤脱であろう。「なげなきも」を河内本は「なげなきを」とする。

このあとに、長い省略がある。「いかがすべき、かかる恐がりきも難かるべきを、かかるついでならはえ立ち寄り、かはらぬ有様ならば、げにさこそはあらめとおしはかるる人さまになむ、とは宣たまひながら、ふと入りたまはむこと、なほつつまじう思き

る。ゆゑある御消息もいと聞えまほしけれど、見たまひし程の口おそきもまだかはらずは、御使の立ちわづらはむもいとほしう、思しとどめつ。惟光も、さらにえ分けさせたまふまじき、蓬の露けきになむ侍る、露すこし私ほせてなむ入らせたまふべき、と聞ゆれば(河内本「聞ゆれば、思しわづらひて、別本「聞えさせれば、思しわづらひぬ」)。

源氏の躊躇〔省略18〕、惟光の進言〔省略19〕。

ここは思うに、源氏は末摘花をたずねるべきだと考えるけれども、別人が通っているかと疑い、それを確かめるためには消息を申し入れるのがよいが、末摘花の返事が遅いのは困惑ものであって、それも出来ない、と躊躇している所に、惟光がお入りになるなら蓬の露を払わせてから、という、その言葉に反撥して急に入る決心をしたのであろう。後文に「なほおりましたまへば」とあるところから、こう考える。

河内本・別本が、惟光の進言があったので「おぼしわづらふ」というのは、面白くない。

○たづねてもわれこそはめみちもなくふかきよもぎのものこのころを、と、ひとりごちて、なをりたまへば——をりたまへば」とは、「車から降り給へば」の意である。もとより源氏は牛車に乗っている。しかし今までは、そのことが判然とする語を全部省略してきた。「なし出でたまへるに」〔省略8〕、「おしとどめさせたまふ」〔省略10〕。この絵は寝殿ちかくを描くので、車を描くことが出来ないからだ、と考えられる。それならば、ここを「なを入りたまへば」とでも訂すれば完全であるが、そこまではしていない。

○御さきの露を、むまのぶちして——「ぶち」とするのは青表紙本のうち御物本・為家本・棟原本・池田本・三条西家本と別本であ

り、それに対し「むら」とするのは青表紙本のうち大島本・横山本・肖柏本 河内本である。

「ぶち」は、辞書には、天治本新撰字鏡五ノ七ウ「鞭夫知」同書八ノ六ウ「策、馬繩也、夫知」をあげ、拾遺集二十哀傷、一三五〇「……太子の乗りたまへる馬、とどまりて行かず、ぶちを揚げて打ちたまへど」を引く。

○うちはらひつゝ、いれたてまつる——青表紙本は「うち」がなく、河内本と別本は詞書に同じい。

○あまそゞきも、あきのしぐれめきて、うちそゞげば——青表紙本「あまそゞきもなほ」、別本は「あまそゞきあきのしぐれめきて」、河内本は詞書と同じである。

○御かさにさふふ——「みかささぶらふ」と、「に」衍字、「ら」誤脱とすべきである。

三、詞書と絵と

○げにこのしたつゆはあまにまさりて、と、まきこゆ——「あま」は「あめ」の誤り。

絵の右端上部に描かれる女は、抜け衰えた髪を元結でしぼり、頬骨が高く突き出ていて、着る衣もなえくちている。詞書にいう「老い人」、本文にいう「侍従の叔母の少将」であろう。

これを末摘花の姫君と見るのが近頃の美術史家に一般のようである。なるほど「色は雪はつかしく白うてきをに、顔つきよなうはれたるに、なほしもがちなるおもやうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。瘦せたまへること、いとほしげにさらばはる、肩の程などは、いたげなるまで衣の上に見ゆ」(末摘花の巻三〇二)と

かの、発見された末摘花の詞書断簡は「さればよとむねつづれたまふ。うちつぎてあななたはとみゆるものは、はなよりけり。ふとめぞとまる。ふげんばさちのりもの」とあって、その絵は姫君の鼻を主題としてとりあげるを辞さなかつたかと思われる。その時の絵は、普賢菩薩の乗り物たる象を描く仏画に彷彿たる描きぶり

をしたことであろう。この蓬生の絵の如き、矮小なるものではあるまい。

邸の人としてただ老女一人のみを描いたと見れば、詞書が「侍従」の名を出さず〔省略14〕、本文では意義ふかい「侍従が叔母の少将」という名も省略し〔省略17〕、ただ「聞きし老い人」とのみ記したのと照応する。

詞書に末摘花の姫君の描写を省略してある〔省略12〕ことも、このように見て特に意味あるを思う。詞書の最初に対の上を省略し

「省略1」、源氏と惟光の間答を省略して常陸宮の名を出さず〔省略11〕、末摘花の辛苦を語る老女の言を省略し〔省略15〕、末摘花の姫君の風性「口おそき」を省略し〔省略18〕、結局ただ源氏と惟光と老女との三人を登場人物として残した詞書の書きぶりは、見事に思い切ったと言ふべきである。

本文を読み続ければ、如何に源氏が紫の上を大切にしているかをこの巻、末摘花の姫君をヒロインとするこの巻においてさえ強調したのが「対の上においと聞えて」の句であった。源氏が訪うべき女君は、もはや僅かに花散里のみであり、天帝の女御の妹君、のちに六条院の夏の御方の主人となり、「上」とさえ呼ばれる人を訪ねるにさえ、紫の上への挨拶が必要であったのである。読み進んで

「省略12」の段に至れば、読者は、なき父宮を思ふ姫君に、めづらし

いのに合う。けれども、その横顔に突兀たるは、普賢菩薩の乗り物(同巻同頁)に喩えられた鼻としては短く、とがった頬骨と見るべきであろう。末摘花の姫君の特徴の一つに、うるわしく長い髪がある。この蓬生の巻にも「わがみぐくの落ちたりけるを取り集めてかつらにしたまへるが、九尺ばかりにいてと清らなるを」(五三一)とあり、晩年の姿を叙しても「いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、まして滝の淀みはつかしげなる御かたはらめなどを」(初音の巻七〇二)というほどであった。末摘花と言えは鼻と髪である。鼻について顔についてあやうた末摘花の巻には続けて「頭つき髪のかかりはしもうつくしげに、めでたしと思ひきしゆる人々にもをさをさ劣るまじう、桂の袖にたまりて引かれたる程、一尺ばかりあまりたらむと見ゆ」(三三二)とある。この絵の髪の細さ短さは、その人と思えぬ。桂姿も古御達なれば許されるであろうし、元結は気位たかきこの姫には考えられないことである。

もとより隆能源氏絵の画者が、物語の本文と変えて描くこともありはする。橋姫の巻で隙見する薫は狩衣姿の筈であるが、絵は直衣にしてあるのは解しがたいが(あるいは、対面の前、直衣に着かえたとあるから混同したので、うち、次の関屋の巻では、源氏一行が空蟬一行にあらはるは関屋近辺と思われるのに、絵はずっと通り過ぎて打出の浜を背景に空蟬の車をおくのは、逢坂山の図として形式化したものの中に、源氏と空蟬と、それぞれに盛大な一行として描き入れようとしたためであろう。

詞書にあえて省略した末摘花の姫君を、ここに描き、しかも、あまりにも姫君らしからぬさまに描くとは、理解しがたいことである。すなわち老女と見たい。

くも好意と共感を持つ。姫君思い入れのこの一段あってこそ、光源氏の不意の訪ずれも、父宮の霊の助けとして、読者は許すであろう。いな、以後長く、六条院に引き取られ、女君の一人に教えられる姫君の幸運を、読者は、この一段のゆえにこそ許すであろう。

しかるに、詞書は、この末摘花の姫君一世一代の思い入れの段をあえて省略した。これがあるのは、この絵の詞書として印象が散漫になり、中心が定かでない恐ろがあるからである。この絵の主眼は荒れ朽ちた邸と、庭一面の蓬生である。あの特徴的な姫君は、描かない方が得策である。

画面ノ右、斜めに四分の一をとったのは、末摘花の邸である。「月入り方になりて、西の妻戸のあきたるより、さほるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いとほやかにさし入りたれば、」(五三八)と、このあとに、源氏の目に見る様を描くが、この絵はそのままである。三年間も手を入れなければ、こうもなるのであろう。花散里さえ、源氏が須磨に行けば、「長雨に築地所崩れて」(須磨の巻四二〇)という有様であった。住む人が居なくなれば、わずか一年で「あばらなる板敷」になるという(伊勢物語四段)。雨さらしの簀子である。

左端に、源氏と惟光がいる。右の邸と左の源氏たちとのあいだ、画面全体の二分の一は、雑草の生い茂る庭である。「同じき法師といふなかにも、たづきなく、この世を離れたる聖にも、のしたまひて、茂き草蓬生をだにかき払はんものとも思ひよりたまはず。かかるかたに浅茅は庭の面も見えず茂り、蓬は軒をあらそひて生ひ

のぼる。むぐらは西東の御門をどちこめたるぞ頼もしけれど、くづれがちなるめぐりの垣を馬牛などの踏みならしたる、道にて、春夏になれば、放ち飼ふあけまきの心さへぞめまじき。……かくいみじき野ら簾なれども」(蓬生の巻五三三)とすでにあった。それは源氏が帰京前のことである。

左端には、光源氏が烏帽子直衣姿で、しのびありきの体である。指貫の袴のそばを高くかかげ、浅沓をのぞかせながら歩む。浅沓は現存する隆能源氏絵ではここ一か所のみ。そもそも君達の歩む姿を描くのは、ここ一か所のみである。後からさしかけられる襖折傘を、傘を持つ白張のいることを示すが、それは画面にはわずかに袖先を見せるのみ。詞書に「あまそぎもあきのしぐれめきてうちそげば、御かささぶらふ、げにこのしたつゆはあめにまさりて」とあるのを、絵にすればこうなるのである。

源氏の前に行くのは惟光である。なえた烏帽子に狩衣姿。狩衣姿もこの絵巻では珍しい。ほかに、次の関屋の巻の旅姿を見るのみである。詞書に「御さきの露を、むまのぶちしてうちはらひつゝ、いれたてまつる」にあたる。

横顔を描かれるのも珍らしく、他には弁の尼(早蕨・東屋第二段)を見るのみで、君達や姫君は、真横ではなく、下ぶくれの頬を豊かに描かれている。

手に持つのは馬の鞭、均衡を失って大きい、画面に目立たすためにこうしたのであろう。実物がこのように大きいのはあるま

左端上部、光源氏にさしかけられた傘の上にあるのは、詞書に「おほきなるまつに、ふちのさきさかりて、つきかげになよびたる」とある松の緑と藤の紫である。

その月は描かれない。もし描くとすれば、右上部に浮び出るはずであるが(隆能源氏絵、鈴虫二段・橋姫)、この蓬生の絵では、右上部に老女を描いたため、描きようがなかったのである。詞書が月についてその最も印象ぶかい出を省略した(省略2)のも、心あつてのことと思う。

詞書に「やなぎもいたくしたりて」という、その柳も描かれないが、それは築地の側であつて、姫君の住む寝殿の近くを描くこの絵では描かずともよいのである。

また、本文に「さし出でたまへる」と言い(省略8)、「おしとどめさせたまふ」と言つて(省略10)、暗示する車をこの絵に描かなかつたのも同じ理由であり、ひいては詞書に省略したのであろう。「木立しげき」を描かなかつたのも同様である。詞書が「森のやうなるを」を省略したのも(省略4)、同じ趣旨であらうか。

四、おわりに

絵と詞書とを見合わせると、物語の本文にあつて詞書に省略したのは、このように、それぞれ意味あつたことと考へうる。この考へは、はたして、当っているか否か、さらに検討を続けねばならぬ。